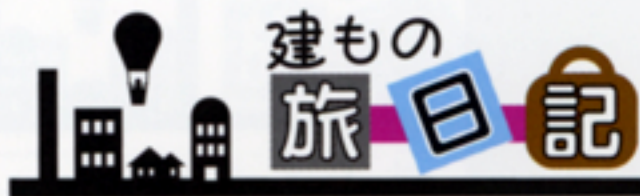




# 第3回



(社)日本建築家協会 沖縄支部 副支部長

運天 勲 柳渡久山設計

## 秋湯と団子屋

2009年の秋、友人3人で旅をした。紅葉と鄙びた温泉で湯船に浸かり、多忙な日々の疲れを癒し、秋を感じてみよう。そして、美味しい団子を食べることが目的だ。羽田空港より東京→栃木・宇都宮へ。そこからレンタカーで日光街道を走り奥鬼怒の山奥にひそむ秘湯・八丁湯へ。秋の雨で黒く濡れた木々の枝と、色鮮やかな紅葉とのコントラストが実に綺麗だ。女夫洩(めおとぶち)からは一般車の乗り入れ

が禁止され、送迎バスで山道を登ること20分。溪流に沿うように佇む宿に着く。奥鬼怒で最も古い温泉といわれ、旧館は入母屋の屋根で日本建築特有の雰囲気醸し出している。旧館と離れ、その間にある庭と露天風呂の湯煙は心憎い演出だ。新館へと繋がる長い板張りの廊下を歩くと、僅かな弾力性ときしむ音がなるとも心地よい。大広間にある直径50センチほどの楓の縮(ちぢみ)

李の大黒柱は、宿主のこだわりを感じる。11月初旬にしてはかかなり冷え込み、白い雪がひらひらと降り出した。

翌朝、外は嘘のような白銀の世界。秋どころか冬まで感してしまっただ。身支度をし、山を下りるころには雪も降り止み陽も差してきた。溶け出した雪の合間から見える紅葉

## 名も無い建物から学ぶこと

と青い空はまるで絵葉書のように美しい。なんと贅沢な旅だろう。

霧降高原を越え、福島県の甲子温泉へ向う途中、那須塩原に寄る。温泉街を抜け、旧塩原御用邸の前の通りを山手の方へ左折。山道をしばらく走ると木々の間を流れる清流の傍らに4代も続く団子屋がある。今にも崩れそうなおきな5、6坪程の古い木造2階建てだ。お団子と日本酒の熱燗を両手に、木箱の上に3×6のコンパネを置いただけのお粗末な椅子に胡坐をかいて辺りを眺めてみる。樹齢7、80年近い杉林、川石に囲まれた溜まりの水面には木漏れ日が差している。そんな景色の中に団



川沿いに佇む団子屋(著者スケッチ)

子屋はすっぽり溶け込んでいる。

「これっていいよね、こうでないといけないよね」

適当な言葉がなかなか見つからない。

本の一節を思い出す。「無学の工匠たちは、

建物を自然の環境に適応させることに素晴らしい才能を示している。今日の私たちがのように自然を征服しようとするのではなく、気候の気まぐれや地形の険しさをよるこんで受け入れる。」 B・ルドルフスキー著の「建築家なしの建築」

旅をするとなも無い建物によく出会う。私たちはこのような建物から学ぶことは沢山あるようだ。